

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K04745

研究課題名(和文) 資質・能力の育成と幼小の接続に焦点をあてた造形教育カリキュラム開発

研究課題名(英文) Art curriculum development in connecting early childhood education and elementary education focusing on competencies

研究代表者

小橋 暁子 (Kobashi, Satoko)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60468395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では資質・能力の育成と幼児教育と初等教育の接続に焦点をあてた造形教育カリキュラム開発を行うことを目的とした。成果として(1)幼児教育、初等教育に携わる教員を対象に造形表現活動に対する認識を明らかにし、(2)教材研究をもとに操作性や発展性の観点から表現素材を選択し、(3)現職教員も交えた内容の検討と教育形態の違いに合わせた実践をそれぞれで実施し具体化し、資質・能力を基盤におき接続を意識した活動内容の開発を行った。また(4)海外の幼小接続期等についての調査を実施した。それらをもとに教員研修プログラム作成と実施、幼小の造形活動での子どもの姿や教育動向を中心に掲載した冊子作成を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼小接続については交流に関する研究や実践は多いが、造形表現活動に特化したものは少なかった。資質・能力を基盤として現場の実情に即した調査をもとに実践をし、子どもの姿から活動を見える化した本研究は、幼児教育での造形表現活動、小学校での図画工作をつなぐ実践をともなう研究事例となるだろう。

具体的な成果としては(1)保育者・小学校教師の造形表現活動への認識の違いを明らかにしたこと、(2)同一表現材料を用いた幼小での実践と分析をしたこと、(3)国内外の幼児教育、初等教育の現状の把握、(4)造形表現活動の中での活動過程を子どもの姿を通してフォトブックレットで見える化したこと等が挙げられる。

研究成果の概要(英文)： This study aims to develop art education curriculum that focuses on Competency as well as the connection between early childhood education and primary education. The results gathered from this research: (1) there was a difference recognition of art education activities of teachers in each education; (2) materials surrounding expressions were selected from the viewpoint of operability and expandability based on research into teaching materials; and (3) the content of activities was developed of connections based on Competency, with an examination of content in tandem with in-service teachers and practice adapted to differences in educational form. Moreover, (4) a survey was carried out on the period connecting each education in foreign countries. Based on these surveys, a teacher training program was devised and implemented. And a booklet created that focuses on the form of the child and infant art activities in pre-schools and elementary schools, as well as educational trends.

研究分野：造形教育

キーワード：造形教育 資質・能力 カリキュラム 幼児教育 初等教育 接続期

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究開始の**2016**年という時期は、新学習指導要領の改訂や実施が目前にあり、幼稚園では**2018**年度から、小学校では**2020**年度から完全実施であった。研究開始前年の**2015**年度には改訂のための「論点整理」が文部科学省より出されている。そこでは資質・能力を基盤においた教育の方向、各校種においても3つの柱で考え方がつなぐことが示されていた。そのような状況も本研究のテーマ「資質・能力の育成と幼小の接続に焦点をあてた造形教育カリキュラム開発」設定の背景の一つとして挙げられる。以下に研究テーマ設定の背景について具体的に述べていく。

(1) 造形教育と資質・能力

幼児教育での造形活動や小学校の図画工作授業内で用いる材料や方法、題材等は多様で多岐に渡る。国内外において、それぞれの造形表現に関する内容開発は活発に行われている。しかし教育計画では、絵や工作等の内容や行事を中心とし作成されているのが実情であり、目標をもとにした計画は少ない。**2020**年度より完全実施の学習指導要領でうたわれている資質・能力の育成に観点をおき、活動目標と内容の関連性・連続性を意識したカリキュラム作成については、学校現場との乖離が考えられた。

(2) 接続期を意識したカリキュラム

幼小、小中の接続期の重要性が言われ、幼小においては子どもたち同士の活動の交流等は計画され行われていた。しかし教員自身の異校種への造形表現活動に関する領域や教科の理解、またそれぞれの内容の理解や子ども理解という点においてはあまり実践や研究も多くない状況があった。しかし本研究の研究者らのそれまでの研究では、子どもたち自身の事象に対する関心を深めていくためには、連続性や関係性を意識することが子どもたち自身の学びの深まりにもつながることが考えられた。

(3) 研究者らの研究内容とのつながり

本研究にかかわる研究者は、本研究に至るまで、幼稚園の造形活動での個の表現活動についての記録分析を行い、個の表現への関心や傾向等の特徴をみてきた。代表研究者と研究分担者の榎との共同研究で**2012**年からは、豊かな造形表現活動環境のある幼稚園で過ごした子どもたちに、それら造形体験がどのように影響を与えているのかについて追跡調査を通じた研究を行った(榎、小橋、**2013-2015**)。

分担研究者の佐藤は、イギリスでのクラフト教育について、日英の比較研究を行っており(佐藤真帆、**2012**)諸外国の動向や日本の小学校の実情にも詳しい。また教科にとらわれない領域横断的な知見があった。

また**2013**年度に幼児期の造形体験が中学生期に与える影響(榎、小橋**2015**)を研究した際に、幼児期に豊かな造形活動体験をしていることが、のちの「共生感」につながるということが統計的に表れた。そこで幼児期の造形活動の重要性とともに、小学校期の造形活動も幼児期からの接続を考え、連続性を意識したカリキュラムをつくることで、ある保育所や幼稚園、または小学校の中だけの豊かな体験で終わらせるのではなく、校種を超えた教育活動として、さらに「共生感」のような資質・能力につながる活動になるのではないかと考えた。そこで、本研究では、各領域や校種を中心に研究活動する研究者でチームをつくり、資質・能力の育成と幼小に焦点をあて研究テーマを設定することにした。

2. 研究の目的

実践的な知見から目標と内容をとらえた活動について幼小を通し、また造形教育によりどのような力が培われたか量的・質的な調査を背景として、整理、分類、分析をし、連続性をもった造形教育カリキュラムデザインを行う。具体的には、各校種の教師や子どもの実態調査をもとに、事例検討や実践を通じた調査等を行い、「資質・能力の育成と幼小の接続に焦点をあてた造形教育カリキュラム開発」までを目的とした。本研究は、これまで各校種内で様々に行われていた造形表現内容を整理し、幼小の造形上限活動に連続性を見出し、子どもの育ちを見通した造形カリキュラム作成のための基礎研究としても位置付けたものである。

3. 研究の方法

研究方法の特徴としては、現場と研究との往還を意識した点である。幼小接続については理論上だけでなく実践に起こしていくことで、学校園の現場にも還元できると考える。そのためには学校園の現場の実態や状況に即し検討し、またそれらを軸として変更できることも重要だと考えた。そこで本研究では、以下の5つの調査等を中心に、学校園の保育者や教員、実際の子どもたちを対象に実施していった。

(1) 質問紙調査

幼小の接続の課題を探るため、造形表現活動についての保育者や教師の意識や活動内容の調査を県内の保育者、小学校の担当教員、合わせて約250名程度に質問紙を配布し実施した。

(2) 教材研究及び教員からの評価

幼児、児童を対象にした表現に広がり生まれる具体的な造形活動の開発については、教材研究及び教員からの評価をもとに行った。具体的には、過去の造形表現活動の実践事例や文献をもとにいくつかの活動を取り上げ、実際の現場での試み後に教員対象の研究会での実施及び評価、再度現場での拡大展開を行った。特筆すべき点としては、造形活動のカリキュラムの具体化のために幼小で表現材料を統一し実践活動を行い検証した点である。

それら一連の調査を通して幼小の教育形態に合わせた活動の内容、活動展開方法、環境設定の把握と検討を行った（2016年～2019年度に実施）。

(3) 活動にかかわる幼児、児童の観察

(2)の調査を受けて、幼児や児童がその表現活動の中で何をするか、何を表すか等を静止画や動画による撮影、及びエピソードを収集し両者の相違点等を研究者及び現場教員らと意見交換を交え分析していった(2016～2019年度は直接観察)。2020年度はCOVID-19の感染拡大のため、研究者らは学校園の現場に入ることはできなかったが、活動を継続していた学校園とはオンライン上での意見交換を実施した。

(4) 国内外の幼小の造形表現活動及び幼小の接続についての視察調査

国内外での幼児教育、初等教育では、どのような造形表現活動が行われているかを把握するために幼稚園、保育園、小学校を研究者らで視察し、視察地域において資料収集、現地の学校園教員らとの意見交換やインタビューを行った（2017年度～2019年度）。

(5) 幼小の接続をふまえた造形表現活動での子どもの様子の見える化

研究を続ける中で、研究内容から造形表現活動について接続を意識し計画していくだけではなく、実際の様子を具体化し外へ伝えることの必要性がみえてきた。合わせて現場の保育者や教員らに研究内容を還元するために視覚資料を作成し、接続を意識した活動の見える化を試みることにした。

4. 研究成果

本研究では主に「資質・能力をふまえた幼小の造形表現活動を、同一表現材料でつないで活動を示したカリキュラムを作成したこと」、「研究内で行った実践活動をもとに幼小の子どもたちの姿をもとに接続期について伝える視覚資料を作成したこと」が成果として挙げられる。また全てに関わる大きな特徴としては現場の学校園との往還が基本にあることである。それらを加え本研究の成果を以下に列記していく。

(1) 保育者・小学校教師の造形表現活動への認識の違い

保育所での表現活動内容と目的及び活動への意識や実態を把握するために保育士を対象に質問紙調査を行い、図画工作についての小学校教員への調査との比較をした(小橋、佐藤、槇 2019)。
。保育士の造形表現活動における悩みは「子ども理解(発達)」、「保育内容と理解」に関することが多いと明らかになった。また保育士自身が考える表現活動で育てたい力は“学びに向かう力”“思考力・判断力・表現力”に分類される回答が多く見られる一方で、幼児期の造形活動で育ててほしい力は小学校側から多い回答として「はさみやのりの使い方」等(小橋・佐藤・槇, 2018)、つまり『3つの柱』(+他)に分類すると“知識・技能”の一部分に分類される回答が多かった。双方が大事にしていることの違いから、保小の間に活動目的に対するギャップが見られた。

(2) 同一の表現材料を用いた幼小での実践

幼児期の造形表現活動は、視覚的な表現だけではなく、直接手で触れたりして感触を楽しんだりもする。また活動形態は一斉活動のみではなく、コーナー活動や自由な遊びの中で行われることも多い。一方、小学校では教科の枠組みの中で、同じ時間・題材で全員が一斉に活動にかかわる。そのような双方の教育形態の違いをふまえて、同一の表現材料を用いて活動を試みた。それぞれの子どもたちに身近な材料を過去の事例などをもとに取り上げ、教員対象の研究会で実践をともなう活動を行い、教材評価(「何が育つと考えるか」)をしてもらった。そこから「泡」「砂・土」「カラーひも」「光・影」を造形材料として取りあげ、幼稚園、小学校の双方で教育形態に合わせた活動実践を行った。幼児と児童の活動傾向の違いや、設定可能な活動・教育目標について検討していったが、いくつかを記述していく。

「泡」を用いた事例

泡は幼児の活動では表現材料として諸感覚に働きかけ全身でかかわることもできるため、事例としては過去からあるが、本研究での教材研究を通して、スポンジと組み合わせることで泡の形が残る場合があることが分かった。材料の特徴として広がりがあることだけではなく、現場教員との教材研究を通して、「学びに向かう態度、人間性等」「思考力・判断力・表現力(の基礎)」「知識・技能(の基礎)」を視点にした際に、活動の提示方法によって広がりがあることが見い

だされた。それらをふまえ、はじめに研究者らが幼稚園においてコーナー活動で実施し、その活動をもとに図画工作専科教諭が小学校で造形遊びとして実践を行った。

造形材料としての「泡」は、幼児にとって表現方法や表現対象・主題の選択が可能であることが分かり、場の設定状況によって立体的な活動にも平面的な活動にも表現形式の広がりが生じることが明らかになった(小橋、榎 2017)。さらに幼児との活動での成果を元に小学校でも「泡」を表現材料として用いた実践を造形遊びとして行った(2年生/『あわあわマジック』)が、児童においても活動の広がりが見られ、泡について形や色、触感を追究する姿が見られ、また図画工作の授業において3観点のいずれも重要となる自由度の高い造形遊びでの実施が可能であったことが分かった。

「土」を表現材料とした幼小での活動

実践調査を依頼していた小学校ではすでに題材として粘土を使った立体や絵(絵具として使用)に表す活動や、焼成しやきものにする活動、さらに粘土質の砂場での造形遊びや立体に表す活動が事例としてあった。そこで本活動ではその事例と合わせて、幼児教育での「土」を表現材料とした活動について検討することにした。土や砂は子どもたちが学校園だけではなく、それ以外の場所でも遊ぶことの多い材料である。馴染みあるものではあるが、幼稚園においては園庭にある土や幼児が土や砂、石等での遊び方やかかわり方を調べ、粘土質を含む荒木田土を中心の材料として、他に小石や砂なども用意することにした。荒木田土を使った実践では幼児は土をふるうなどして、自分のよい感じに水と混ぜて質感を楽しむ姿や、形をつくり友だちとごっこ遊びに使う様子、丈夫にしたい箇所に塗り固める様子等、多様な広がりが見られた。さらに人と関わり合いながら、時には共同で表現していくことが幼小ともによく、教材研究の視点からは材料の特徴をとらえて場の設定を行うことや、試す時間や場所の保障、また感じたことや思ったことを伝えあえる仲間や大人が身近にいることが、表現の幅を広げたり深めたりすることにもつながるのではないかと分析した。

「カラーひも」を表現材料とした幼小での活動

絵を描く際には途中でやり直すことが難しい場合が多い。砂に指で絵を描くように、すぐに絵にしたり消せたりすることで、発想をすぐ形にしたり試行錯誤したりしながら自分なりの表現につなげることができないだろうか。そのことは思考し、判断し、表すという資質・能力にもつながるのではないかと考え、浦安市の認定こども園ですでに実施されていたカラーひもをつかった活動をもとに、幼稚園での試行実践では正方形の木枠とカラーのひもとを合わせた活動を実施した。幼児は様々な色合いのひもを自分たちの感覚で選び、偶然性から形にししたり、表したいものを計画的につくっていったりという姿がみられた。また小学校では本数を限定した中で何が出来るか、共同では何が出来るかと、タブレットで製作したものを記録しながら、ひもでできる形を考える授業が専科教諭により行われた(5年生/『もよう発見隊 ひもの世界』)。ここでは形や色を工夫する姿だけではなく、自然発生的に共同でひもの動きを撮影しアニメーション化する等の表現方法の工夫もみられた。使用材料は同じであるが、幼小において組み合わせる用具や教師の投げかけにより発展や広がりが見られることが分かった。

「光・影」を表現材料とした幼小での活動

影絵やステンドグラスづくりなど、古くから光や影を取り入れた活動は造形表現の内容としてもよく行われている。本活動では「表す」だけではなく「見る」ことにも着目し、海外調査で視察したレッジョ・エミリアでの実践活動の一つであるミラーや光源を使った活動を複数試みた。特に教員からの教材評価で、興味関心が高い、活動の広がり、子どもたちなりの工夫、等の意見が多かった。三角鏡、ミラーテーブルとしく、ライトテーブルと砂等を使った活動を校種や教育形態に合わせて実践を行った。幼児は三角鏡の中に色々なものを投入し、万華鏡のように見える様子を複数で楽しんだり、ライトテーブル上で砂を動かし、工夫して遊ぶなどの行為がみられた。小学校ではミラーテーブルと3色のカラーインクでつくった色水をスポットで落とし表していく活動として図画工作科担当教員が実施した(3年生/『ようこそしくの世界へ』)。小学生は混色や水滴の形の変化を楽しんだり、それらを三角鏡で鑑賞し、さらに違うアプローチでしくの落とし方を変える等、また学年が変わると追究する視点が深くなる等について実践者の教員らからの報告を受けた。

それぞれ幼稚園及び小学校での実践や過去の事例から、内容、環境構成、活動の中での表現の広がり等について分析をし、教材評価をした上で、幼小で表現材料を同一にした表現活動づくりを行った。以上の内容は保育者、教員養成コースや研修などで活動の様子をつたえることにもつながっている。

(3) 国内外の幼児教育、初等教育の現状

国外では、フィンランドエスポー市、ハンガリー、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育、初等教育について各研究者が視察を行い、各地域での状況を調査したりインタビュー等を行い、論文(佐藤、小橋、榎、2019)や教員対象の研究会、講習会等で報告し、また研修用教材作成を行った。さらに調査したものは(4)のブックレットにも掲載した。

海外視察を通して得たことの一つとして活動過程の重視、またそれを見せ伝える工夫の事例は、日本の造形教育でも参考とすべき点が多々あり、調査内容をもとに教材化し教員対象の講習会で用いた。

(4) 造形表現活動の中での子どもの姿の見える化

本研究で調査をし明らかになった研究の成果を幼児教育、初等教育の現場に見える形として還元する資料の重要性が、海外の視察を通して見えてきた。特にレッジョ・エミリアでの視察では写真を中心としたフォトブックレットを各幼児学校や乳児保育所で作成しており参考になった。そこでこれまでの研究を精製し、公開方法を検討するために研究延長申請を行い、研究活動内で実践した中で見られた幼小の子どもたちの姿の画像をもとに個人情報保護を行った上で、ブックレットの形式をとり見える化をした。さらに研究紀要なども閲覧できるよう QR コードをつけ、これまでの研究論文にも接続できるよう試みた。なおブックレットは次の項目から構成されている。

タイトル

「幼小接続カリキュラム-造形表現・図画工作、海外の実践より-」

編著者

本研究の研究代表者及び研究分担者（小橋暁子 榎英子 佐藤真帆）

本文の構成

はじめに

メッセージ編

幼児教育と小学校教育の接続を造形教育から考える

海外の幼小接続とアート教育

実践編

泡

土

ひも

光・影

海外リサーチ編

フィンランド

ハンガリー

イタリア

資料編

おわりに

幼稚園や小学校の教員への配布用として 1300 部作成し、次年度より随時配布する予定である（教員対象で限定公開配布、全 48 ページ / カラー印刷 / ISBN 9784901404334）。

(5) 成果から見られた課題

以上の成果はあったが、本研究において接続期の調査を行った際に明らかになった保育者や教員の意識のギャップに対する方策、また資質・能力を基盤におく造形活動の保育者、教師自身の理解を進めていく点において課題が残る。それらもふまえ今後は、造形表現活動の中での造形的なものの方の見方・考え方を視点の一つとして、保育者及び教員養成でのカリキュラムづくりや実践についての研究を進めていきたい。

< 出典 >

小橋暁子、佐藤真帆、榎英子「幼小をつなぐ造形教育カリキュラムの研究 (2) : 実態調査の結果と保小の比較」『千葉大学教育学部研究紀要』、67 巻、pp.395-400、2019

小橋暁子、佐藤真帆、榎英子「幼小をつなぐ造形教育カリキュラムの研究 : 実態調査の結果から」『千葉大学教育学部研究紀要』、66 巻 2 号、pp.413-420、2018

小橋暁子、榎英子「『造形表現』と『図画工作科』の接続 : 「造形表現」に焦点をあて」『千葉大学教育学部研究紀要』、65 巻、pp.467-475、2017

榎英子、小橋暁子、小林恭代「『造形表現』と『図画工作科』の接続 : 「図画工作科」に焦点をあて」『千葉大学教育学部研究紀要』66 巻 2 号、pp.395-404、2018

榎英子、當銀玲子「表現を育む保育環境 3 - 砂による表現の広がり - 」第 69 回保育学会ポスター発表、2016

榎英子、小橋暁子、當銀玲子、井上郁「表現を育む保育環境 - ひもによる表現のひろがり - 」第 72 回日本保育学会ポスター発表、2019

佐藤真帆、小橋暁子、榎英子「フィンランドにおける幼児教育の中での造形表現活動 : エスポー市の保育園視察報告」、『千葉大学教育学部研究紀要』、67 巻、pp. 385-394、2019

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 佐々木達行 鈴木大啓 江藤知香 小橋暁子	4. 巻 68
2. 論文標題 造形, 美術 (図画工作・美術科) 教育における資質・能力 (教育課題・目標) を基盤にした授業デザインとカリキュラム編成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 99 - 109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤真帆 小橋暁子 榎英子	4. 巻 67
2. 論文標題 フィンランドにおける幼児教育の中での造形表現活動 ~ エスポー市の保育園視察報告 ~	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 385-394
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小橋暁子 佐藤真帆 榎英子	4. 巻 67
2. 論文標題 幼小をつなぐ造形教育カリキュラムの研究II - 実態調査の結果と保小の比較 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 395-400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 榎英子、小橋暁子、佐藤真帆	4. 巻 66 2号
2. 論文標題 「造形表現」と「図画工作」の接続	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 395-404
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小橋暁子、佐藤真帆、榎英子	4. 巻 66 2号
2. 論文標題 幼小をつなぐ造形教育カリキュラムの研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 413-420
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎 英子、當銀玲子	4. 巻 52
2. 論文標題 領域「環境」・領域「表現」と環境の構成 - 戸外保育環境における開発的実践研究の検討から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 淑徳大学研究紀要 (総合福祉学部・コミュニティ政策学部)	6. 最初と最後の頁 77-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎英子	4. 巻 177 - 1
2. 論文標題 幼児教育における教材	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 幼児の教育	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小橋暁子 榎英子	4. 巻 65
2. 論文標題 「造形表現」と「図画工作科」の接続	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 467-475
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎英子	4. 巻 949
2. 論文標題 図画工作の基盤を育む遊びとしての造形体験	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 94-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 榎英子 小橋暁子 當銀玲子 井上郁
2. 発表標題 表現を育む保育環境 - ひもによる表現の広がり -
3. 学会等名 第72回日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小橋暁子 榎英子
2. 発表標題 幼小をつなぐ造形教育カリキュラムの研究
3. 学会等名 第72回日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoko Kobashi, Maho Sato
2. 発表標題 Art Curriculum Development in Early Years -Nursery school teachers -
3. 学会等名 InSEA European Regional Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoko Kobashi, Maho Sato,Hideko Maki
2. 発表標題 Art curriculum development in early years
3. 学会等名 35th World InSEA Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小橋暁子 槇英子
2. 発表標題 幼児期の造形体験が及ぼす影響
3. 学会等名 第69回日本保育学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大橋功 佐藤賢司 馬場千晶 大橋麻里子 藤田雅也 槇英子 辻政博 南伸裕 玉置一仁 花原幹夫 平田耕介 清田哲男 杉山貴洋 星野沙耶花 羽溪了 銭谷真美 藤澤英昭 鈴石弘之 水島尚喜 神野真吾 西野範夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 公益財団法人 美育文化協会	5. 総ページ数 352
3. 書名 美しい未来を創る子どもたち	

1. 著者名 柏女 霊峰、槇 英子、齊藤 崇、江津 和也、桃枝 智子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 保育者の資質・能力を育む 保育所・施設・幼稚園実習指導	

1. 著者名 吉田 武男(監修)、石崎 和宏(編著)、直江 俊雄(編著)、佐藤 真帆(第9章)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 初等図画工作科教育	

1. 著者名 小橋暁子 榎英子 佐藤真帆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小橋暁子 榎英子 佐藤真帆	5. 総ページ数 48
3. 書名 幼小接続カリキュラムー造形表現・図画工作、海外の実践よりー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榎 英子 (Maki Hideko) (20413099)	淑徳大学・総合福祉学部・教授 (32501)	
研究分担者	佐藤 真帆 (Sato Maho) (30710298)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------